

出羽三山詣で42日間の旅
～江戸時代の旅人の足跡～

1. 房総半島各地に残る出羽三山碑
まちや古街道歩きで出会った多くの記念碑
2. 「出羽三山と山伏展」(千葉県立中央博物館にて)
高年齢層を引き付ける山岳宗教の魅力
3. 江戸時代に記された道中記の記録
立寄り地・宿泊地から旅人の足跡(ルート)の復原
4. 「奥の細道」は出羽三山が目的か?
語られぬ湯殿にぬらす袂かな(松尾芭蕉)
5. 山の登拝口、八方七口の宗教集落
手向(とうげ)・七五三掛(しめかけ)・大網・本道寺・岩根沢・大井沢・肘折
6. 戸惑った宿坊のもてなし
羽黒山麓の手向(とうげ)での宿坊体験
7. 盛んだった社寺参詣の旅
信仰としての旅か、物見遊山の旅か
8. 江戸時代の旅のイメージ
宿泊は?
費用は?
旅装・携帯品は?

出羽三山詣で42日間の旅 ～江戸時代末旅人の足跡～

- 旅の目的 霊場(聖地)巡礼
- 旅の形態 東北周遊の旅(往復約1400km) *聖なる円環の旅か
- 時期 江戸時代末期(1840年代) ■出発地 上総・葦波(千葉県袖ヶ浦市)
- 目的地 出羽三山(羽黒山・月山・湯殿山)
- 旅行期間 42日間(6月17日～7月27日) *宿泊地名は当時のまま
- 旅人 出羽三山講の行人
- 旅行費用 3両(*約30万円)
*米価で換算すると、江戸初期は1両=10万円、中～後期1両=4～5万円。1両=米1石(1人の一年分の米消費量と銭(文)の時価相場では、江戸中・後期の1両=6～7万円)
- 行程

旅行日	ルート	宿地	旅行日	ルート	宿泊地
6月 17日	袖ヶ浦—江戸	船中泊	8日	本道寺(湯殿山神社) —大沼(寒河江市慈恩寺)—	左沢(あてらざわ) (20)
18日	日本橋—	千住(8)	9日	左沢—	山寺(30)
19日	千住—*慈恩寺(岩槻) *坂東観音霊場 12番札所・天台宗古刹	慈恩寺(32km)	10日	山寺—野尻(秋保)— 愛子—	仙台(50)
20日	岩槻—幸手—古河—	藤岡(47)	11日	仙台—塩釜	松島(35)
21日	藤岡—岩船山高勝寺—出流(*満願寺) *北関東の霊場 17番札所 関東の高野山	出流(栃木市)(29)	12日	松島—吉麻—	仙台(35)
22日	出流—(山道)—上久我(*加蘇山神社)*古代の神祀る古社	尾鑿山(御師坊)(32)	13日	仙台—	大河原(56)
23日	上久我—古峰ヶ原(*古峰神社) *天狗信仰日光発祥の地	石裂山麓(20+20)	14日	大河原—白石—	瀬の上(40)
24日	上久我—*大谷観音(宇都宮)— 日光*9番札所、大谷磨崖仏	日光(50)	15日	福島—二本松—	本宮(38)
25日	東照宮(袂を着て参拜)— *中禅寺 18番札所	日光	16日	本宮—郡山—	小田川(52)
26日	日光—今市—藤原—	高原(38)	17日	白河—白坂	黒羽(33)
27日	高原—横川—(山王峠)	田嶋(51)	18日	黒羽—	益子(54)
28日	田嶋—楢原(下郷)—桑原*大内宿通過	会津高田(45)	19日	雨にて延泊	益子
29日	高田—柳津(*圓蔵寺)—塔寺— *虚空蔵尊	塩川(55)	20日	益子—岩瀬(富谷観音?)— 樂法寺(*雨引観音) 24番札所	雨引(現桜川市)(20)
30日	塩川—(山越え)—綱木(番所あり)	綱木(44)	21日	雨引—筑波山(*筑波山神社)	筑波山(22)
7月 1日	綱木—米沢—亀岡 (*大聖寺)— *亀岡文殊堂	赤湯(34)	22日	筑波山—土浦—	船中(51)
2日	赤湯—上山—	山形(32)	23日	*大杉神社(稲敷)—潮来— 鹿島*あんばさま*鹿島神宮	香取(30)
3日	山形—天童—尾花沢	大石田(47)	24日	香取神宮—飯沼観音(銚子)	銚子(37)
4日	尾花沢—古口—(最上川下り)—	清川(50)	25日	銚子—八日市	八日市場(30)
5日	清川—狩川—羽黒山 *羽黒山神社	羽黒(本坊)(16)	26日	八日市場—東金— 八幡—	八幡(53)

6日	羽黒一月山登拝（月山神社）	月山（笹小屋）	27日	八幡一蔵皮	袖ヶ浦（21）
7日	月山—湯殿山— *湯殿山本宮	本道寺	合計 42 日間 往路 650 km復路 674 km		

（袖ヶ浦講の羽黒山での食事）

朝食 こんにゃくとインゲンの煮物、瓜の酢の物、焼き豆腐の汁、瓜の奈良、漬豆腐、夕顔とみょうがの酢味噌和え、油上げとしいたけの煮物

夕食 焼き豆腐、詰め昆布、夕顔の煮物、さざえゴマ和え、菜っ葉おひたし、ジュンサイと大根おろしの酢の物 あんころもち、干し柿とあられ 7采+2嗜好品

出羽三山詣で



山形県の月山、羽黒山、湯殿山は出羽三山と呼ばれる。時代によって別の山が三山に加わった時期もあるが、江戸時代はこの三つの山がセットで、山岳修験の霊場を形成していた。

その信仰圏（霞・檀那場）はほぼ東北地方全域と関東などに広がり、行人と呼ばれる専門の修験行者だけでなく、多くの一般庶民が参詣に訪れた。これを「三

山参り」とか「三山詣で」、「お山参り」、「東の奥参り」とも呼んだ。

各地から三山に向かう人々は、奥州街道や羽州街道ほかさまざまなルートで参詣道にアクセス。江戸時代中期の享保18年（1733）の記録によると、湯殿山の縁年にあたる同年の三山参詣者は15万7000人以上を数えた。江戸後期には、平年でも5万人を超えたといわれる。

*「お山詣り」をする者は、講をつくり行屋に籠って一週間、斎戒沐浴（生もの食べない）の修業をつむ。この修行中には家族も精進料理を食べ、口説論争を慎み無益な殺生を避けた。

出羽三山信仰を支えてきた信者たち

同心円的に広がった信仰圏（勢力圏）

第一次信仰圏（山形・岩手・宮城・福島）

遥山・一日登拝圏 青少年層の三山登拝（十五の初参り）

八方七口の山岳宗教集落の勢力圏宗教集落の御師、山先達の人々、在地修験（里先達）：羽黒派の末派修験の人々（院号を補任された人々）

第二次信仰圏（山形・岩手・宮城・福島）*秋田・青森は希薄

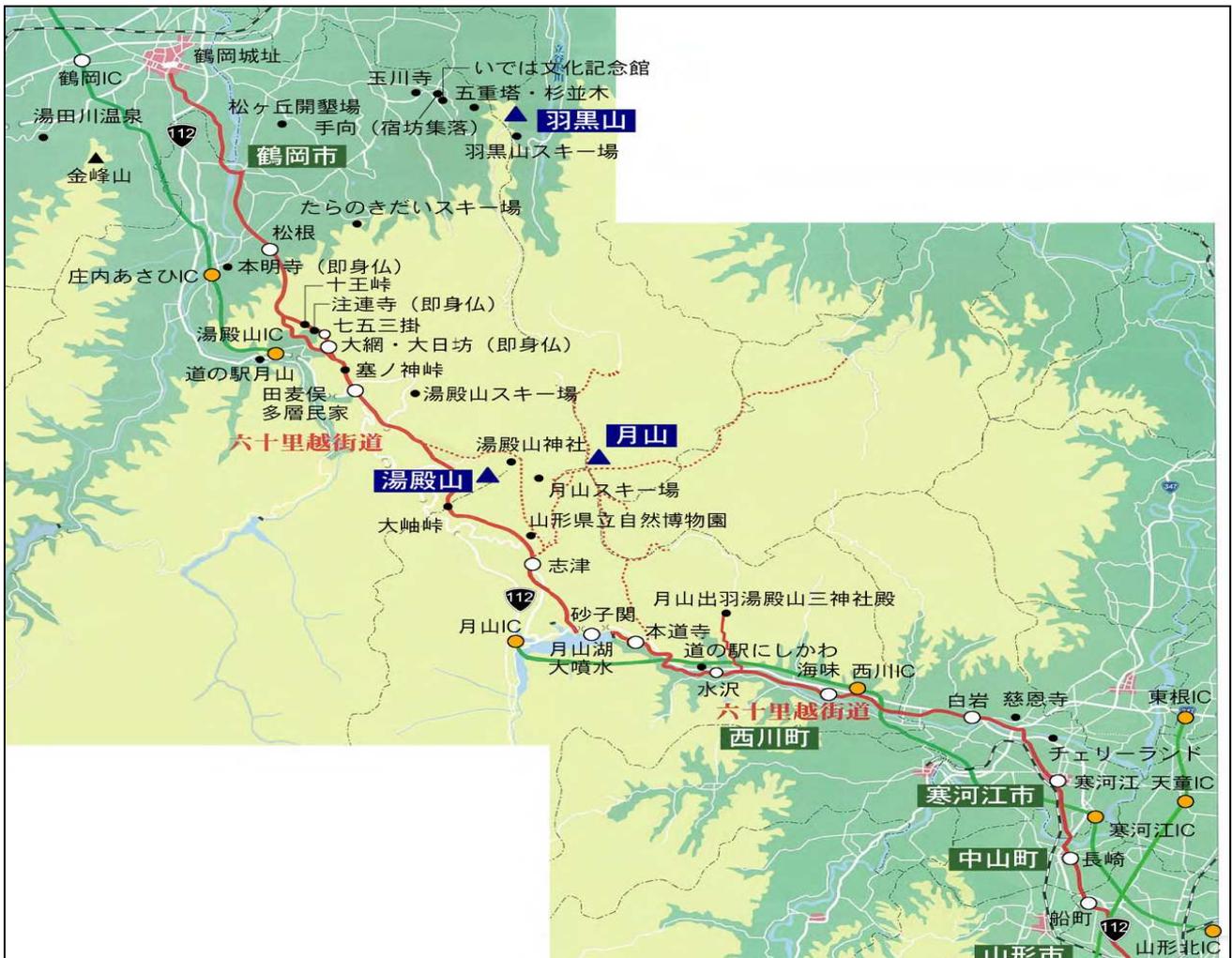
一日登拝は無理な地で、御師が配札した圏内 代参講形式

成人層（戸主層を主）の道者・行人が参詣 例）最上詣り・女人講

第三次信仰圏 北関東（千葉、栃木、茨城、群馬、埼玉、神奈川）

御師が配札した圏内、同行仲間型講形式

老年層の参詣（回国巡礼的）、この他、信仰圏外の観光客など



出羽三山参詣の旅

内陸地方と庄内地方の中間に位置する出羽山地にそびえる羽黒山（標高414m）・月山（標高1984m）・湯殿山（標高1500m）の総称。古く（中世）は、湯殿山を別格の「総奥之院」として、月山・羽黒山に葉山あるいは鳥海山を加え、出羽三山と数えた時代もあった。

日本においては、古来より山そのものが神であり、そこを神域として、身を清めて汚れを祓う神聖な場所であると考えられていた。また、人間が神の宿る山から魂を授かり、この世に生を受け、死後その霊は山に登り、山頂で神になるという山岳信仰の世界観が生まれた。先祖の霊が仏にも神にもなることで、山は一層深い崇拜の対象となった。

出羽三山は、古くから東北を代表する修験の山でもあったが、平安末期以降、多くの民衆の心を捉え、信仰を集めるようになり、日本屈指の霊場となった。羽黒山は現世（聖観世音菩薩＝観音浄土＝現在）、月山は前世（阿弥陀如来＝阿弥陀浄土＝過去）、湯殿山は来世（大日如来＝寂光浄土＝未来）という三世の浄土をそれぞれ表す。

近世の出羽三山の巡り方は、羽黒山から入り参詣、修行し、月山で死と甦りの修行を行い、総奥之院の湯殿山参詣で再生して終わるといったのが、一つの典型的な巡り方であった。参拝者が死と再生を体験するというものであった。関東からの参詣者は手向から上り口（表駆け）、南東北からの参詣者は他の上り口（裏駆け）から登拝する人が多かった。

江戸時代の旅のイメージ

1. 江戸時代の旅の特色

■江戸初期の旅（寛永・慶安・明暦・万治・延宝・元禄）の特色 1600年代

“旅とおいものはそれだけの理由がなければすることが難しいものである。武士は領主の命令に従って旅をし、農商工はそれぞれ家職のために旅をし、また後生の菩提を願って信心のために国々を巡礼修行する者がいる。しかし詩歌の趣のためや、慰み遊山のために旅行する者など、世に稀である。”

（川崎宿の名主田中休愚（1704）が記したもの。尚、芭蕉の旅は元禄期（1689年）。

■江戸中期の旅（宝永・正徳・享保・延享・宝暦・明和・安永・寛政）の特色 1700年代

“旅が庶民レベルにまで広がった時代であるが、これは何度となく繰り返されたお陰参りと抜け参りが黙認されていたことの影響が大きい。お陰参りは、慶安3年（1650年）、宝永2年（1705年）、享保3年（1718年）、享保8年（1723年）、明和8年（1771年）、文政13年（1830年）に行われているが、もともと60年ごとに伊勢の神威があらわれると噂が広まり、爆発的に流行したものであるが、必ずしも60年ごととはいえない。”

■江戸後期の旅（享和・文化・文政・文久・天保・弘化・安政）の特色 1800年代

“往来の旅人、互いに道を譲り合い、泰平をうたう。つづら馬の古室節ゆたかに、宿場人足その町場を争わず、雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのすから独行し、女同士の道連、むけ参りの童まで、盗賊かどわかしの愁にあわず。かかる有難き御代にこそ、東西に走り南北に遊行する、雲水のたのしみえもいわれず。”（十返舎一九 東海道中膝栗毛の描写）

2. 旅籠と食事

■旅籠

旅籠は1泊しか宿泊できない宿で、江戸市中では商人など長く逗留する者もあり、市中にある旅籠を作家池波正太郎は宿屋と呼んでいる。旅籠は朝、夕の食事も提供する宿で、客が持参した食料を煮炊きするための薪を提供した宿を木賃宿と称した。

江戸時代の旅の主要な費用は、旅費の50%以上を占める旅籠代であったが、値段は予想以上に安く、しかも安定していた。旅籠が提供する食事の内容や寝具により、上・中・下とランク付けされていて、どんな旅人が来ても対応できるようになっていた。

旅籠賃（2食付）は、時代によって上下するが、江戸時代を通して東海道の宿代を平均で見ると、170文（1807年）、181文（1845年）程度が一般的で、200文が目立つようになるのは1850年頃からという。天保十三年に品川宿で定められた旅籠賃が200文で、中山道が148文、京都は200文から250文であったという。出羽三山詣りの記録では、参詣者は150～200文の旅籠に多く宿泊していた。

*200文の価値 大工の1日賃金が350文

東海道の宿泊平均旅籠代（宿場ごとに値段が違う）で見ると、170文（1807年）、181文（1845年）、250～350文（1863年）と高騰している。

1800年代からの60年間は200文程度であったが、幕末期に入ると旅籠代は急騰している。1824年の常陸国から伊勢へ旅した人の記録には、神奈川で150文、大磯で132文、小田原で200文、沼津で132文、これ以降の地は124文で泊まったと書き留められていた。この時代は、東海道中膝栗毛が大ヒットし、成熟した江戸の町人文化が地方にも広がった時代で安心して旅ができた時代である。

地方では（1819年）、善光寺の宿泊は安く（105文～112文）、中仙道（同一料金）では116文（1816年）、132文（1841年）、164文（1852年）、柏崎では、上旅籠200文、中旅籠150文、下旅籠120文との記録がある。

注）上は1汁3采、中は1汁2采、下は1汁1采と食事内容が違う。木賃宿は35文～50文。

■食事

羽黒山宿坊の例（湯殿山・月山・羽黒山道中記より）

天保9年7月7日江戸出立 7月21日羽黒着 代参 朽津伊兵衛 羽黒の文殊坊宿泊

「御山参詣中2昼夜の泊り案内料不残相済 坊の馳走殊の外なる事 故茶代として金3朱（11,250円相当）也置 此日着きたる時酒肴そうめんの昼食 此後むろぶた肴4品外に膳に太平にて酒ふるまひ是相済也 夕食2の膳付 少し過ぎて又酒肴いろいろ 又少し過ぎて寝酒 22日朝食2の膳付酒出す 少し過ぎてむろぶた太平いろいろ肴酒済て直に昼也 お茶漬け済てそろそろ支度致し出立 此時山の内何もなきとて香の物を沢山に下され 又御山参詣中のけさ下され 又三山の絵図餞別と申て下され候 外のはんてんもも引せんたく致し呉れ申候」（出羽三山信仰の歴史地理学的研究（岩鼻通明著）

（参考）伊勢の食事はすごかった！

“一生に一度はお参りしたい”伊勢の旅の世話をしたのが御師。御師は、講の一行が伊勢に到着したら、籠や馬に乗せて神宮の門前を案内し、旅館では、玄関に入ったところにある浴場に案内し、そこで身を清めさせ、夕食前に、神樂を見せた。宿の料理は豪華で、本膳、二の膳、三の膳まで出た。伊勢海老やアワビの舟盛が用意された。普段、一汁一菜の生活をしている人にとって豪華料理付きの最高のもてなしであった。

3. 旅装と携行品

■服装

庶民男性の場合、上は着物（尻はしよりにした膝上までの物）に合羽（半合羽・裕せとも呼ぶ）と股引と脚絆、草鞋（わらじ）、菅笠。荷物は、平行李（ひらごうり）や風呂敷に入れて振り分けし、肩に掛けた。三山詣りの農民は、上は野良着に、着ゴザ。

道中着とは女性が旅行をするときに着る衣服。旅装束を指すが、狭義で道中着衿（上っ張り）のことを道中着と呼ぶこともある。男性の場合は、道中合羽を羽織ったが、省かれて合羽と呼ばれるようになる。武士の場合、道中羽織、野袴（のばかま）を着た。

*小林一茶の旅姿は、上は着物に十徳を、下は股引、手甲脚絆で草鞋履き。草履は稲わらで作るが、草鞋指が外にでておらず、鼻緒に足を引っ掛けるだけのもの。

■携帯品

- ・必ず携行せねばならないものが、道中手形（往来手形・関所手形）
*往来手形は身分証明書で、自分の菩提寺と名主（庄屋）に届け出て、住所、名前、目的や事故にあった時の処置を書いてもらい身元引受人になってもらったことを証明するもの。往来手形が一般庶民を対象としたものであるのに対し、関所手形は、関所を通行する時、身分の上下を問わず必要な手形で、関所毎に必要なとされた。
- ・扇、湯手拭、弁当箱、薬、針、「蠟燭立て」・「燧石（ひうちいし）」など
- ・その他 旅枕、矢立（旅枕は旅をするとき持参するのが普通で、「矢立」は墨を入れる壺と筆をセットで携帯用にしたもの）

4. 旅程と費用

■旅程

武士の場合、一日に十里歩くのは普通で、一般男性も一日当たり平均約40km位歩いてたとされ、足弱の女性にしても25kmは歩いた。昔は江戸と京は15日間掛けて歩いていた。三山参りの旅程をみると、一日50km以上歩いた日もあった。三山参りでは踏襲されたルート歩いていたようで、最初に歩いたルートがほぼ決められた旅程となったようだ。

■旅の費用

例1) 参詣道中の旅籠代

湯田川 130文 鶴岡 200文 山寺 190文 肘折 100文
山役銭 101文（羽黒）

例2) 群馬県甘楽郡の旅人（50日間）

弘化4年（1847）*甲州から富士川を下り東海道へ、そして、伊勢・金比羅に行き、帰路は中山道から善光寺を廻って帰宅した
旅行費用 3両1分+銭600文（約20万円）この他に、代参として行ったので、昼食代、わらじ代、茶代、名物の食べ物代などは自費払い

内訳

1. 宿泊代 計 10万5千円（53%）
イ) 宿坊5泊（秋葉山1、伊勢3、高野山1）3貫800文（3万5千円）
ロ) 旅籠屋代40泊 7貫450文（7万円）1泊平均1750円
2. 交通費 計 2万7千円（13%）
イ) 川23箇所渡し船賃 443文（4100円）
ロ) 大井川渡し船賃 156文（1400円）
ハ) 金比羅までの海路往復船賃 1貫600文（1万5千円）
*船中4泊食事代含む
ニ) 富士川下り川船賃 200文（1800円）

3. 買い物 計 7万1千円 (35%)

イ) みやげ等 5貫842文 (5842文) (5万4千円)

ロ) 神社お札・お祓い 1貫887文 (1万7千円)

(参考) 1両=60,000文 1文=9.3円で計算 銭相場1両=銭6400文

(参考) 江戸時代の貨幣

一両 1両=6000文から7000文 *幕府公定レート4000文
円換算で6万円~7万円位) 江戸時代後期

一分 1分=4朱 *普通2朱 (7千5百円) で流通した 1両=4分=16朱
円換算で1万5千円

一貫文 1貫文=1000文
円換算で1万円

一さし・・・1千円

一文 (一銭)・・・10円感覚

日銀金融研究所の説明によると、江戸時代中期の1両 (元文小判) は、当時の米価、賃金 (大工の手間賃)、そば代金を参考にして現在の価格との比較では、1両の価値は、米価で約4万円、賃金で30~40万円、そば代金で12~13万円となる。

この価値も江戸時代の各時期において差がみられ、米価は初期で10万円、中~後期で3~5万円 (平均で4万円)、幕末頃には3~4万円になる。非常にバラツキがあるが、両と銭 (文) の為替相場が変動した中期以降は、1石 (これは1両) の価値が下がるので公定レートで受け取る武士の場合、銭 (文) の受け取りは一定であるので家計は苦しくなる。

上方でも「両」を使い、「文」も江戸と同じように使った。「文」と並んで日常貨幣として使ったのが「匁」(もんめ) (目 (め) ともいう) で、これは銀の単位。一両が60匁、65匁と、「両」との関係は変動相場制になっていた。1700年 (元禄13年) から1842年 (天保13年) までの幕府公定レートは、金一両=銀60匁=銭4,000文であったが、実際には時価相場で交換されていた。